

國學院大學學術情報リポジトリ

Production Activities at the Former Tokugawa Akitake Garden (Tojo-tei Garden)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kodera, Akihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000478

旧徳川昭武庭園（戸定邸庭園）における生産活動

小寺瑛広

はじめに

江戸時代の大名庭園は、儀礼と交際、饗応のための空間であり⁽¹⁾、水田や畑での稲や野菜の栽培、御庭焼の作陶など、生産活動の場でもあった⁽²⁾。

筆者は前稿⁽³⁾で最後の水戸藩主であった徳川昭武（1853-1910）の私邸・戸定邸の庭園において、御庭拝見や饗応など、江戸時代以来の儀礼や饗応が行われていたと明らかにした。華族制度下になっても、“少し前まで大名であった”華族たちは、大名庭園のもつ儀礼的機能を継承していたのである。

では、大名庭園の機能のうち、生産活動の場としての性格は継承されたのだろうか。戸定邸庭園では、御庭焼「戸定焼」の作陶活動が行われ、明治28年から同43年（1895-1910）の間に、総計755点もの陶器が贈答に用いられている⁽⁴⁾。その点では、戸定邸庭園もまた、生産活動の場であったといえる。だが、果樹や農作物、園芸植物については課題として残されていた。

江戸時代の大名庭園の植栽については、尾張徳川家を対象とした長谷部由紀氏・白根孝胤氏の研究、柳澤信鴻居住期の六義園を対象とした飛田範夫氏・小澤弘氏・小野佐和子氏の研究⁽⁵⁾がある。長谷部氏は市ヶ谷邸の花壇の植栽や用途を明らかにし、鑑賞・食用・儀礼用の植物があったと述べている。また、白根氏は10代藩主徳川齊朝の植物学への関心と庭園植栽への熱意、彼の庭園世界観を明らかにした。飛田氏は信鴻が六義園に植栽した植物の購入先を分析しているが、植木屋や花屋側に論点を置いている。逆に小澤氏は、庭園の手入れや植木屋との交流など、庭園側に重きを置いている。小野氏は六義園を舞台にした信鴻の暮らしぶりや庭園利用の実態を明らかにしている。

華族家の庭園についても、宮崎幸恵氏（尾張徳川家大曾根邸）や、田畑貞寿氏（佐倉堀田家旧堀田正倫邸）の研究がある⁽⁶⁾。宮崎氏は、東部・西部・北部に農園を有し、各園で渡来植物や珍種の栽培がなされていた点や、果樹園や水田、畑地をはじめ、和風庭園や菜園までも有していた事実を踏まえ、大曾根邸と大名屋

敷との類似性を指摘する。田畑氏は旧堀田邸庭園が、眺望と借景・玉川式（煎茶趣味）・茶屋と梅園の3つに区分され、この他に農事試験場があったとする。

平成27年（2015）3月に国指定名勝となった戸定邸庭園は、平成28・29年度に復元工事が行われ作庭当時の姿に復元された⁽⁷⁾。庭園構造は、典型的な書院造庭園である一方、建物のすぐ側まで芝生を植え付け、円錐形樹形のコウヤマキが木立を成して主景を構成する洋風庭園である⁽⁸⁾。戸定邸と庭園の創設期の様子は、齊藤洋一氏によって明らかにされている⁽⁹⁾。明治17年から同19年（1884-86）にかけて、樹木の移植や庭石の整備、芝生の植え付けが行われ、コウヤマキやヒヨクヒバの大木が労力をかけて移植された点は特筆に値する⁽¹⁰⁾。また、西側から南側にかけて存在したアオギリの木立の重要性も指摘されている⁽¹¹⁾。

しかし庭園の構成要素は、主景を構成する樹木ばかりではない。果樹や農作物、園芸植物などに注目することで、昭武がどのような植物に関心を示し、栽培していたのか、さらにはどのような庭園構想を持っていたのかが明らかとなるはずである。これらの生産活動に注目し、近世から近代へと連続する視点で見直すことで、どのような位置付けができるのかを、合わせて考察してみたい。

1. 戸定邸の鉢植え植物

昭武の子孫である松戸徳川家（子爵家）には植木鉢が5点伝来した。いずれも瀬戸焼の瑠璃釉であり、大きさや深さはそれぞれ異なる【写真1～5】。（以下、掲載写真は全て松戸市戸定歴史館所蔵）



左【写真1】瑠璃釉鶴丸雲文植木鉢 高20 径25 松戸徳川家書画工芸1-2-9-1

右【写真2】瑠璃釉竹に福良雀文植木鉢 高31 径38.5 松戸徳川家書画工芸1-2-9-2



左【写真3】瑠璃釉鶴亀甲文植木鉢 高23.5 径33 松戸徳川家書画工芸1-2-9-3

右【写真4】瑠璃釉獅子牡丹文植木鉢 高16 径33 松戸徳川家書画工芸1-2-9-4

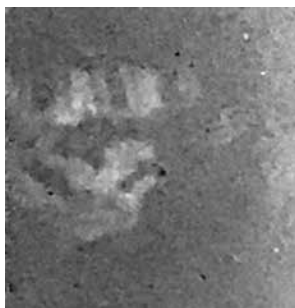


【写真5】瑠璃釉鶴波涛文植木鉢 高21 径36 松戸徳川家書画
工芸1-2-9-5

類似作品には、3代川本治兵衛作《尾張染付波に白鶴浮出模様丸鉢》（宮内庁所蔵）や⁽¹²⁾、シーボルトが収集した3代川本治兵衛作《瑠璃釉鶴文大植木鉢》（高32.7、口径39.2、ミュンヘン五大陸博物館所蔵）⁽¹³⁾がある。明治時代の作では、さいたま市大宮盆栽美術館所蔵の《瑠璃釉染付群鶴波涛文丸鉢》（瀬戸焼・明治時代、幅32.6、高23.7）や《瑠璃釉竹に福良雀文丸鉢》（瀬戸焼・明治時代、幅33.5、高24.4）が知られる⁽¹⁴⁾。

徳川家伝来植木鉢のうち、3点は明治後期に戸定邸での使用が確認できる。明治37年（1904）1月に昭武が「中庭」で撮影した写真【写真6】には、植木鉢が数個写っている。左側の植木鉢については、図柄から【写真3】と同定でき、シュロチク用と判明する⁽¹⁵⁾。右側の写真は縁の下に置かれた植木鉢の右半分である。

【写真5】と文様が共通する。また、明治41年（1908）撮影の「花シャボテン」【写真15】には、シャボテンが植えられた状態の【写真4】が写る。



【写真6】直垂・陣羽織・陣笠姿の徳川武定（部分）1904.1徳川昭武撮影 10×6.9 松戸徳川家写真
1-3-1-3-66

このように、戸定邸内では、鉢植え植物の栽培も行われていた。「戸定邸日誌」（以下、「日誌」）や徳川昭武「戸定備忘録」⁽¹⁶⁾から作成したのが【表1】である。このうち、詳細が明らかとなる4種類について見ていきたい。

（1）オモト（万年青）

戸定邸で栽培された鉢植え植物で特筆すべきは、昭武生母・徳川秋庭のオモト栽培である。「万年青」の初見は明治22年（1889）11月8日、「根岸肴屋」が秋庭

の万年青拝見に戸定邸を訪れたとの記事である。この「肴屋」は東京根岸〔現・台東区〕の篠常五郎という万年青屋⁽¹⁷⁾で、秋庭のオモト栽培に不可欠な人物である。篠常五郎については、平野恵氏⁽¹⁸⁾が経歴や家系を明らかにしている。彼は金杉村根岸93番地に居住していたオモト専門の植木屋であり、先祖は魚屋を営んでいたという。初代肴屋吉五郎が文化年間（1804-18）に活動し、二世肴屋吉五郎までは駒込に居住した。根岸には安政4年（1857）以前、常五郎の父恒成の代に移住している。常五郎は毎年自らの邸宅で万年青共進会を開催し、明治18年（1885）に『万年青図譜』『万年青培養秘録』を相次いで刊行している。

このように、オモトの専門家であった常五郎は、明治25年（1892）9月30日から同44年（1910）2月21日までの間、定期的に戸定邸へ参邸し、ほぼ春季と秋季に植え替えに従事した。また、明治40年（1907）10月26日には篠常五郎を通じ、秋庭の万年青が共進会に出品された。

秋庭は、自らオモトの手入れも行っている【写真7】。その熱意は、栽培環境の整備にも向けられた。明治30年（1897）12月2日には、自室（離座敷棟）の北側に「万年青室」を新築した【写真8・9】。彼女にとってオモトや万年青室は自慢であったようで、万年青室落成の際には、自室に職員を招き晩餐を饗している。明治26年（1893）9月16日には来訪者にオモトを披露し、同年10月4日にも「万年青御植替濟」として職員を招き、陳列を披露し、茶菓を振る舞っている。【写真10～12】は座敷飾りとしてのオモトである。



左【写真7】「秋庭おもとの手入れ」 1905.10徳川昭武撮影 10×7.2 松戸徳川家写真1-3-1-3-73

右【写真8】万年青室 1901.5.17徳川厚撮影 4×14.2 松戸徳川家写真1-3-1-3-75



左【写真9】「万年青」 1906.10.14徳川昭武撮影 9.8×14.5 松戸徳川家写真1-3-3-38

右【写真10】「万年青」 1907.7.25徳川昭武撮影 9.6×14.4 松戸徳川家写真1-3-3-34



左【写真11】戸定邸離座敷床の間 1898.5.8徳川慶喜撮影 10×14.8 松戸徳川家写真1-3-5-1-14

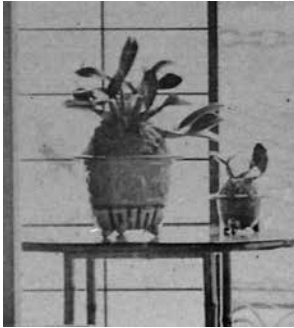
右【写真12】戸定邸離座敷 1898.5.8徳川慶喜撮影 10×14.8 松戸徳川家写真1-3-5-1-13

(2) セッコク・ラン (石斛・蘭)

秋庭居室には、万年青だけでなく、セッコクの鉢植えも飾られている【写真13】。戸定邸における蘭の初出は、明治29年(1896)7月12日、松平頼孝子爵(分家石岡松平家当主)がコウモリランを贈ったとの記事である。その後、明治40年(1907)11月27日に「支那蘭盆栽鉢」を伏見宮に献上している。この前日、昭武は「博恭王殿下へ献上ノ盆栽」【写真14】を撮影しており、献上先は伏見宮継嗣博恭王と判明する。このランは台紙裏墨書によれば、昭武の実兄土屋舉直子爵の遺愛品であった⁽¹⁹⁾。また、逆に昭武も博恭王から蘭を拝領しているようで、12月3日には「博恭王殿下ヨリ拝領之蘭花」の写真を2枚撮影している。

博恭王は園芸を趣味とし、華頂宮家当主時代より蘭を愛好した。特にシンビジウムという種類の蘭を好んだという。温室には数多くの洋蘭のほか、熱帯植物もあり、晩年にはマンゴーも栽培していた⁽²⁰⁾。三田の宮邸にあった博恭王の温室は、妃經子の父・徳川慶喜(昭武の兄)によって撮影されている⁽²¹⁾。単に義理の叔

父と甥という関係に加えて、このような蘭を通じたネットワークを昭武と博恭王は有していたのである。



左【写真13】部分

右【写真14】「博恭王殿下献上の盆栽」 1907.11.26徳川昭武撮影 15×10.9 松戸徳川家写真1-3-3-13-2

(3) アサガオ (朝顔)

明治33年(1900)7月31日、茨城県士族出身の甲府始審裁判所長鶴峯申敬(-1902)から、自らが丹精込めて栽培した「牡丹咲朝顔八種」が献上された。彼は昭武に直接拝謁し、アサガオを土鉢へ移植した。その後、戸定邸で変種アサガオの栽培が継続したかどうかは不明である。

(4) サボテン (仙人掌)

明治38年(1905)10月2日、埼玉県安行村〔現・川口市〕の苗木商吉田耕三郎が戸定邸の「大しやほてん」を見に訪れているので、これ以前よりサボテンが栽培されていたようだ。昭武も明治39年(1906)10月14日と同41年(1908)年春頃に戸定邸でサボテンの写真を撮影している【写真15】。また、明治44年(1910)9月10日には溝口武五郎(秋庭の孫娘の夫、溝口伯爵家4男)より秋庭へ、ダリア・スイセンとともに「仙人掌」が贈られている。撮影年月日は不明だが、秋庭が数多くのサボテンを栽培する姿が残る【写真16】。また、サボテンもランと同様に博恭王からの拝領品があったようで、徳川達道伯爵(一橋徳川家当主)が撮影した写真【写真17】が伝わる。



左【写真15】「花シャボテン」 1908.徳川昭武撮影 16×12 松戸徳川家写真1-3-3-7-2



右【写真16】秋庭とサボテン 11.4×15.7 松戸徳川家写真1-3-1-3-82



【写真17】「伏見若宮殿下より拝領品」 徳川
達道撮影 14. 2×9. 6 松戸徳川家写真
1-3-3-14

小括

戸定邸内では、鉢植え植物という形でオモト・ラン（セッコク）や、アサガオ・サボテンなど、江戸時代以来の園芸植物⁽²²⁾が育てられていた。秋庭はオモトの専門家・篠常五郎との、昭武はセッコクやサボテンの献上・下賜を通じて伏見宮博恭王との交流・人脈をそれぞれ有していた。これらの鉢植え園芸植物は、中庭や私室、あるいは万年青室など、庭園や表座敷棟のような饗応の場と異なる居住区画で栽培されており、私的要素が強い存在と認識されていたと考えられる。

2. 戸定邸庭園における果樹・農作物の栽培と生産活動

徳川昭武は、松戸町内に73000㎡の土地を所有していた⁽²³⁾。戸定邸庭園の「御堀外」にも畑があり⁽²⁴⁾、昭武自身が農作業を行った「御手作畑」まで存在した⁽²⁵⁾。同じ旧御三家の尾張徳川家本邸・大曾根邸には、3区画に分けられた農園が存在し⁽²⁶⁾、西部農園（1万2000坪）では、葵紋をかたどった分科園をはじめ、喬木林、草花園、温床、暖室、舶来野菜園、緑庭、果樹園があった。また、北部農園（1万2000坪）には水田・畑・樹林が、東部農園（1万2600坪）は竹林・水田となっていた⁽²⁷⁾。尾張徳川家とは規模は異なるが、戸定邸庭園でも果樹や農作物の栽培が行われていた。これらの栽培・生産活動はどのような性格を有していたのだろうか。関係記事をまとめた【表2】をもとに、15種類中12種を見ていこう。

(1) カキ（柿）

明治18年（1885）1月21日に高野楨・桃とともに、柿へ「寒肥」を与えている。よって、これより前から柿が植栽されていたとわかる。その後、明治25年から同35年（1892-1902）にかけて、柿の接ぎ木のために、小合村〔現・葛飾区〕の平野宗七郎や「御抱植木職」の高木傳蔵が作業を行っている。その数は、明治27年（1894）3月14日に20本、同月16日に数十本、同33年（1900）4月6日に6・7本とある。10年間にわたっての接ぎ木は、柿の栽培に力を入れていた証といえる。

(2) ダイコン（大根）

明治18年（1885）8月29日に大根の種を蒔き、12月9日に「御畑」の大根を抜いたとある。また、明治21年（1888）12月7日にも大根洗をしたとの記事がある。

(3) チャノキ（茶）

戸定邸庭園には茶園があり、茶の生産を行っていた。戸定邸引き移りの翌年には茶園が存在しており、明治18年（1885）5月25日に「御屋敷下御茶園」で茶摘みをしている。この「御屋敷下」とは、当時の小字名である戸定下、すなわち戸定邸のある台地の西側、現在常磐線の線路となっている辺りと考えられる。明治25年（1892）2月13日、馬場新設にあたり、「戸定下茶園」で職人2名が工事を始めている。よって、少なくとも鉄道敷設以前は、ここに茶園があったと考えられる。一方、明治24年（1891）5月時点で「御屋敷内之茶摘」と記され、その後も「御邸ノ茶摘」「御園ノ茶摘」の記述があるため、庭園内にも茶園があったと考えられる⁽²⁸⁾。

その後もほぼ例年、5月に茶摘みが行われている。明治24年（1891）には「此奥表一同」、同37年（1904）には「奥一同」で茶摘みをしたとあり、戸定邸詰の

徳川家職員が茶摘みをしていたようだ。また、明治38年（1905）と同40年（1907）には、職人が来邸し、製茶作業を担っている。この他、戸定邸を訪れた家族・親族が庭遊びの一環として茶摘みをすることもあった。

（4）ネギ

明治18年（1885）8月24日に平野宗七郎が葱苗を持参し、同20年（1887）7月12日には平野が葱苗を持参した葱苗を「御畑」に植え付けている。以後、明治34年（1901）に至るまで、同様の事例が確認できる。

（5）ザクロ（柘榴）

明治20年（1887）4月26日、馬橋村幸谷〔現・松戸市〕より柘榴を引き取り、「御庭内」へ移植した。その後、明治25年（1892）10月2日に「御中庭柘榴」の植え替えがなされている。

（6）トマト（赤茄子、番茄）

戸定邸でのトマト栽培は、明治21年（1888）5月19日に平野宗七郎が参邸し、「番茄・苜蓿等」を植え付けたとの記事が最古となる。明治26年（1893）には、これを用いた「赤茄子搾汁」（トマトジュース）の製造に取り組んでいる。8月9日、昭武の兄土屋舉直子爵の紹介で、砂町〔現・江東区、舉直は深川区富川町在住〕の永田亀吉という人物が製造法伝授のため戸定邸を訪れた。「日誌」にはそのレシピ（「赤茄子搾製造法方」）が残されているので、現代語訳して紹介したい。

トマト11.25kg～15kgを、水で洗い、ひとつひとつこれを切断し、よく種を搾り取り、大釜で徐々にこれを茹でる。トマトが焼き付いてしまわないように、たびたびかき回す。しばらく茹でていると、泡立ってくる。その泡を杓子で取り除き、よく茹でてこれを桶に汲み上げ、目の細かい米あげザルを用いてスリコギでよく擦る。小豆の餡を作る時のように、カスを取り去り、ザルより搾り取った粘液をビンに詰め、コルクで蓋をする。銅線で堅く封をして、大釜の中にむしろを敷いて、その上に順番に並べる。そして水を7分目まで入れ、松の薪で徐々に焚き、沸騰してもますます追い炊きし、3～4時間程焚いて火を止める。そのまま翌日の朝まで自然に熱が冷めるのを待って、取り出す。

こうしてトマトジュースを製造し、翌10日、永田は帰京した。8月24日には2貫1目（7.5kg以上）、ビン3本のトマトジュースを製造し、9月11日にもビン10本を製造している。

(7) ダイダイ (橙)

戸定邸庭園にはダイダイがあり、ポン酢が製造されていた。明治25年(1892)12月7日には、「御庭園ノ橙」大小280個あまりを用いて、ポン酢ビン7本が「御製造」されている。「御製造」とあるので、昭武自らの手によると思われるだろう。明治27年(1894)11月28日にも、300もの橙の実を収穫し、それを絞ってポン酢を製造している。

(8) ブドウ (葡萄)

明治26年(1893)9月16日、國友武貴が戸定邸に参邸した際に、「庭園ノ葡萄」を献上している。このブドウが果実であったのか、木であったのかはわからない。その後、明治36年(1903)10月20日には、戸定邸詰の徳川家職員安食裕と、大能牧場職員の跡部操が、「茨城県牛久村神谷傳平持有葡萄園」の栽培方法視察のため、出張している。すなわち、神谷傳兵衛の神谷葡萄園〔現・シャトーカミヤ〕である。すでにブドウを栽培していたか、あるいはこれから栽培を始めようとしていたのだろう。

明治42年(1909)8月16日には八柱村大橋〔現・松戸市〕佐々木牧之助より「葡萄鉢植一鉢」が献上されているし、翌43年(1910)8月20日には、「御自園梨子・葡萄等」を長女の婚家である松平伯爵家に送付しており、ブドウ栽培に成功していたと見るべきだろう。

(9) (10) キノコ・クリノキ (栗)

明治26年(1893)10月7日、徳川家の子供たちが戸定邸で「御茸狩・栗ひろひ等」をしたとあり、邸内にクリノキがあり、キノコが自生する環境であった。明治28年(1895)10月6日にも昭武の姪にあたる土屋家の娘たちが「御茸狩・栗落とし」をしている。キノコ狩りと栗拾いは戸定邸の秋の風物詩であったようだ。明治43年(1910)9月22日には、第八高等学校在学中のため名古屋で下宿生活を送っていた昭武2男武定に「栗実并二梨子」を送っているの、クリの実は徳川家の人々に好まれていたのだろう。

(11) ナツミカン (夏蜜柑)

明治36年(1903)4月19日、二十世紀梨の発見者として知られる松戸覺之助⁽²⁹⁾(1875-1934)の家よりナツミカンを引き取っている。

(12) ナシノキ (梨)

ナシノキは明治39年(1906)3月6日、カキとともに八柱村大橋〔現・松戸市〕久左衛門方より移植されたとの記事が初出である。翌年(1907)11月8日には、

二十世紀梨の発見者である松戸覺之助が、ナシノキ栽培の件で戸定邸に参邸している。直後の13日には戸定邸職員が大橋へ出張し、ナシノキを引き取っている。松戸覺之助は大橋の住人であり、このナシノキは二十世紀梨であった可能性も考えられる。ナシノキをめぐる覺之助との交流は、その後も続く。明治41年（1908）11月26日、徳川家職員金澤誠が植樹の件で土屋子爵家（昭武甥）へ出張し、28日に覺之助を訪ねている。同44年（1910）2月20日にも、金澤誠は手入れの件で溝口武五郎（溝口伯爵家4男、昭武の義甥）邸へ出張している。さらに、同年9月5日には溝口が覺之助を訪問し、同月23日には覺之助が戸定邸を訪れている。このように、松戸覺之助を中心に、昭武（および武定）と親族である土屋家・溝口家には、ナシノキ栽培のネットワークが形成されていたのである。

戸定邸には明治44年（1911）6月までに「梨子畑」が存在し、草取りや施肥もなされていた。また、大正3年（1914）2月の時点では早川久壽雄という人物によって手入れが行われている。このように栽培された梨は、親族への贈答に用いられ、高松松平家（昭武長女昭子婚家）・一橋徳川家・長府毛利家（昭武2女政子婚家）、土屋家（昭武甥）、尾張徳川家・田安徳川家（昭武2男武定夫人実家）などの親族や、学校の関係で名古屋に下宿していた武定（昭武2男）にも送られた。

小括

戸定邸庭園では、15種類の果樹・農作物が栽培されていた。これらは日常の食料としてだけでなく、柿・葡萄・梨・栗の実は親族への贈答品として用いられていた。また、橙・茶・栗は、昭武自身や来訪者の遊楽や饗応の役割を果たしており、江戸時代の大名庭園の機能が継承されたといえる⁽³⁰⁾。一方、トマト・梨・葡萄のように、最先端の技術や人的ネットワークを取り入れる実験的な側面もあった。この点では、華族家の農事試験場や農場⁽³¹⁾のような、新たな一面が見られる。

また、農作物の栽培においては、小合村〔現：葛飾区〕小合新田の平野宗七郎（-1907）の強い関与がみられる。宗七郎は徳川家の「近郷御用達御土地御世話人」「御出入」で、野菜や米、漬け物などを戸定邸に納めていた⁽³²⁾。しかし、それだけに留まらず、宗七郎は明治40年（1907）10月に死去するまで、昭武との密接な関係を築いていた。それは、祝い事の際、職員や旧臣以外に陪食を許した数少ない人物（もう1人は松戸の有力者で初代町長安蒜權左衛門）であり⁽³³⁾、昭武がわざわざ平野の姿や邸宅を撮影している事実からも裏付けられる⁽³⁴⁾。さらに、御庭拝見や花見への招待、猟犬の子犬を下賜するなど⁽³⁵⁾、身分の差を超えた格別に親しい関係性にあった。それは、明治40年9月20日、胃癌で重病の床にあった宗七郎に対し、昭武から「朝鮮餅并ニ鶏卵料金千疋」を下賜し、10月29日の死去に際しては、職員を平野家に弔問させ、「金千疋」を贈与していることから

窺えるだろう⁽³⁶⁾。

宗七郎の死後、息子の八太郎^{はつたろう}の代になると、父親ほどの親密さはなくなるが、糯米の注文や、子犬・塩鮭の贈答が続けられている⁽³⁷⁾。

4. 戸定邸庭園における畜産活動・鳥類飼育

前章までに、植物や農作物、果樹の栽培・生産活動を明らかにしてきた。しかし、戸定邸庭園では、明治20年代後半より、植物栽培にとどまらず、養蜂や鳥類の飼育も行われていた【表3】。なかでも、養蜂とクジャク飼育は注目に値する。これらの畜産・飼育活動を、昭武周辺で描かれた「諸鳥写生集」の存在も視野に入れつつ、位置づけたい。

(1) 養蜂

明治27年(1894)2月25日、戸定邸職員安食裕が「養蜂密御用」で出京したとあり、これが養蜂の初出記事である。安食は2日後の27日に帰邸している。同年5月12日、安食は再び「駒場農学校」[後の東京大学農学部]⁽³⁸⁾へ伝習に出張し、6月28日には同校よりミツバチ1箱を引き取り、養蜂を開始した。10月19日から21日にかけて、ミツバチと巣箱に異変があった際には、「養蜂書」を見た上で、25日まで状況を観察し、記録している。翌28年(1895)5月17日にはミツバチを仮箱やモクレンのモクレンの花に群集したミツバチを「水離法」を用いて新箱に移す作業が行われた。同年7月4日には徳川宗家(千駄ヶ谷邸)より巣箱を引き取っているが、女王蜂がいなかったため放棄したとある。よって、徳川宗家においても養蜂が行われていたと判明する。戸定邸でいつまで養蜂が行われたかは定かでないが、大正3年(1914)6月6日に巣箱を金町農事試験場へ譲渡しているので、この頃までは継続していたようだ。

(2) 孔雀

明治29年(1896)4月6日、浅草公園内藤半兵衛よりつがいのクジャクを購入したのが初出である。このクジャクは「鳥小屋」へ放ったとあり、これ以前より鳥が飼育できる態勢が整備されていたようだ。このつがいには何か問題があったため、5月21日には「御交換之孔雀」が戸定邸に運ばれた。翌30年(1897)8月までには雛や卵が生まれており、繁殖や孵化の体制も整っていたといえる。このときに戸定邸で生まれたクジャクは、同年9月12日につがいで有栖川宮威仁親王の葉山別邸に献上されている。その後、翌31年6月にも卵の孵化が確認できる。また、卵や羽根は贈答品としても用いられており、少なくとも明治35年(1902)7月14日までは戸定邸でのクジャク飼育が確認できる。

(3) スズメ（雀）

明治29年（1896）6月16日に飯塚村〔現：東京都葛飾区〕 獵師・鳥屋の大川亀吉が「雀糞」を返納し、翌日「巢鳥」を持参している。

(4) 「諸鳥写生集」

戸定邸での鳥飼育がなされていた明治29年（1896）11月から12月にかけて、「諸鳥写生集」【写真18】という写生帳が作成された。松戸徳川家に伝来し、昭武ないしその周辺で描かれたと見られる。この写生帳には、ヘキチョウ、セキレイ、コマドリ、ブンチョウ、ソウシチョウ、カワラバト、カワラヒワ、クジャク、ベニスズメ、ヤマガラ、ダルマインコ、マヒワの12種類が描かれている。このうち、クジャクとスズメは戸定邸で飼育されていた個体かもしれない。



【写真18】「諸鳥写生集」 1896.11-12 松戸徳川家文書1-1-6-3-15

小括

戸定邸では20年間養蜂が行われていた。職員は東京帝国大学農科大学の最先端技術を学び、養蜂を通じた徳川宗家とのネットワークも存在した。昭武の父・齊昭は養蜂を一般に広めようと、蜂の習性や飼育方法などを基に「景山養蜂録」を著しており⁽³⁹⁾、職員が参照した「養蜂書」と同一の可能性もある。養蜂を開始した動機には、父齊昭の存在があったかもしれない。ただし、養蜂自体は江戸時代に尾張徳川家や紀伊徳川家の庭園でも行われており⁽⁴⁰⁾、そういった文化的背景も考慮に入れる必要がある。また、鳥類飼育については、昭武の兄・慶喜や一橋徳川家でも鶴を飼育しており⁽⁴¹⁾、大名庭園文化の延長として位置付けられる⁽⁴²⁾。さらに、今後検討されるべき課題であるが、昭武周辺で描かれた写生帳「諸鳥写生集」が江戸の博物画⁽⁴³⁾の系譜に位置付けられるとしたら、大名庭園文化の延長としての性格はより補強されるだろう。

附. 戸定邸庭園以外での生産活動

以上、4章にわたり戸定邸庭園の生産活動を検討してきたが、昭武が果樹・農作物栽培や畜産活動をさせていたのは、何も戸定邸庭園のみに限らない。水戸徳川家が経営する大能牧場や天龍院牧場、戸定邸周縁の農家でも、実験的な農作物栽培や畜産が行われていた。本章では少し視点を広げ、昭武が戸定邸庭園以外で進めていた生産活動の一端を明らかにしたい。彼はどのような生産活動を構想していたのだろうか。その視座を見通したい。

(1) 大能牧場

大能牧〔現・茨城県高萩市〕は水戸藩2代藩主光圀によって開牧され、昭武の父である9代藩主齊昭も復興を試みたが、廃牧となっていた。明治時代に入り、新たな収入源を必要とした水戸徳川家は、家政運営の一環として、明治15年(1882)政府より土地の払い下げを受けて復牧に着手した。昭武も牧場運営に力を入れ、馬種改良や植林事業を行っていた⁽⁴⁴⁾。

明治27年(1894)2月2日には、二合半領長沼〔現・埼玉県三郷市〕の金子七蔵より、大能牧場に試験的に播くための早米種を取り寄せ、同月8日にこの種籾と「ビヤク檀杉種、スハウ種」を通運丸で大能牧場へと送っている⁽⁴⁵⁾。牧場での栽培品種や、植樹する苗木の選定にも、昭武自らが関与していたのである。

(2) 天龍院牧場悠然亭

水戸徳川家では、大能牧場の隣接地である天龍院〔現・茨城県常陸太田市〕でも牧場を経営していた。昭武は明治19年(1886)に悠然亭という別邸を建設し、作庭にも取り組んだ。明治33年(1900)9月2日、ここで蜂蜜を採取しており⁽⁴⁶⁾、天龍院でも養蜂がなされていたとわかる。

(3) メロン

昭武は明治40年(1907)7月24日・28日にメロンの写真を4枚【写真19～22】撮影している。彼の写真撮影記録「カビネ形ゴタク撮影控」から判明する撮影日時・時間は、7月24日午前9時50分、および7月28日の午前9時から9時20分の間である⁽⁴⁷⁾。当日の「日誌」に「大橋村瓜苗御見分」「大橋村瓜園」とあり、撮影場所は大橋〔現・松戸市〕である⁽⁴⁸⁾。注目したいのが、7月24日9時40分に撮影された写真である。昭武が「大橋村農宮三次郎一家」と題した写真【写真23】には、4人の農家の家族が写る。メロンの写真が撮影されたのは、この10分後である。当時の撮影時間や移動時間を考えると、撮影地はごく近くであったと考えられる。「日誌」の「大橋村瓜園」が宮三次郎の畑であった可能性は高い⁽⁴⁹⁾。

よく見ると家族の背後には、地に葉を伸ばした植物と畑が写っており、この推測を補強してくれる。いずれにしろ、明治40年（1907）時点で、松戸でメロンが栽培されていたのは確かである。秋山徳蔵によれば、明治17、8年頃（1884-85）に福羽逸人子爵がヨーロッパより種を取り寄せて、宮内省御苑と自邸でメロンを栽培したのが、日本で初めての栽培とされる⁽⁵⁰⁾。この他、京都山科木村太一郎温室・農科大学・岩崎家・大隈重信侯爵家でも試験的に栽培していたという。大橋でのメロン栽培も、これらに連なる早い時期の栽培といえる。

これだけでは、このメロン栽培と昭武とを結びつけることはできない。前年9月17日にフランスのレオポルド・ヴィレット（1822-1907）から昭武へ送られた書簡を見てみよう。ヴィレットは昭武が1867年から68年にかけてフランスに留学した折に、將軍慶喜の依頼でフランス皇帝ナポレオン3世から遣わされた教育掛である。帰国後も交流は続き、1878年から1907年までの間に昭武へ送られた105通もの書簡が残されている⁽⁵¹⁾。

明治39年（1906）9月17日、ヴィレットはメロンの種を昭武へと送っている⁽⁵²⁾。それは「侯爵様〔註：昭武〕の御所望」であった。4月8日に昭武がヴィレットへと送った手紙には、おそらくメロンの種を所望する旨が記されていたはずだ。9月7日に手紙を受け取ったヴィレットは、妻マリー・マティルドにメロンの種の手配を頼み、手紙を記した9月17日以降に日本へと送った。手紙は消印のある10月14日には東京へ届き、昭武はメロンの種を落手している。しかし、ヴィレットは2か月後の明治40年（1907）1月12日に84歳で亡くなり、メロンの種は彼からの最後の贈り物となった。そして、昭武が大橋でメロンの写真を撮影したのがその年7月である。

撮影したメロンは1883年にフランスで発行された *Les plantes potagères* に掲載されており⁽⁵³⁾、当時フランスで栽培されていた品種であった。さらに、写真裏に昭武がフランス語で品種名を記している点からも、フランス由来と考えられる。これらの事実から、ヴィレットが送った種が、大橋で栽培されたメロンである蓋然性は高いと考える。昭武は当時最先端のメロン栽培をも意図し、それを成功させていたのである。



【写真19】「二号 ムロン・カンタルプ・プレ
コット・ハーチブ」
Melon cantaloup Prescott petit hâtif
1907.7.28徳川昭武撮影 9.7×14.8
松戸徳川家写真1-3-3-31



【写真20】「一号 ムロン・カンタルプ・ノワ
ール・ド・カルム」
Melon cantaloup noir des Carnes
1907.7.28徳川昭武撮影 9.6×14.8
松戸徳川家写真1-3-3-32



【写真21】「四号 ムロン・シュ克蘭・ド・
テウル」 Melon sucrin de Tours
1907.7.24徳川昭武撮影 9.6×14.4
松戸徳川家写真1-3-3-33



【写真22】「三号 ムロン・カンタルプ・プレ
コット・フラン・ブラン」 Melon cantaloup
Prescott fond blanc
1907.7.28徳川昭武撮影 9.8×14.4
松戸徳川家写真1-3-3-36



【写真23】「大橋村農宮三次郎一家」(部分) 1907.7.24徳川昭武撮影 14.6×9.8 松戸徳川家
写真1-3-1-3-158

おわりに—戸定邸庭園における生産活動と昭武の庭園構想

戸定邸内では、徳川昭武や母秋庭の居住区画で江戸時代以来の園芸植物が鉢植えとして育てられていた。彼らはランやおモトなど、愛好する植物を通じた人的交流を持っていた。

庭園内や隣接する畑では、果樹・農作物の栽培だけでなく、鳥類飼育や養蜂さえも行われていた。それらは来訪者へのもてなしや贈答品としての饗応機能も担っており、江戸時代の大名庭園の機能が継承されたと評価できる。また、養蜂や鳥類飼育自体も大名庭園文化の延長線上に位置付けられる。その一方、昭武は最先端技術に興味を示し、職員を農事試験場や大学、醸造場などへ派遣し、果樹・農作物の栽培方法・調理法・飼育方法を伝習させ、積極的に導入していた。戸定邸庭園には近世と近代の要素が共存していたのである。

昭武の視点は戸定邸庭園に留まらず、水戸徳川家が経営する大能・天龍院牧場、戸定邸周縁の農家での生産活動にも注がれていた。牧場での養蜂、栽培品種の選定や導入、輸入したメロンの栽培など、昭武自身が積極的に関与している。

もう一点注目したいのは、昭武が戸定邸庭園で行った生産活動と、父齊昭が借楽園で行った殖産興業活動⁽⁵⁴⁾との関係である。齊昭は水戸緑岡に茶園を設け、製茶と養蜂を行っている。また、借楽園内に製陶所を設けて七面焼を生産させ、自身でも御庭焼「借楽園焼」の作陶を楽しんでいる。戸定邸庭園内でも製茶・養蜂・戸定焼の作陶が行われ、構成要素が共通する。昭武の庭園構想には、父齊昭の借楽園構想⁽⁵⁵⁾の影響があると考えられる。

一方、他の華族家庭庭園での生産活動と異なる点もある。大曾根邸庭園（尾張徳川家）では農園内に博物館や植物園が、旧堀田正倫庭園（佐倉藩堀田家）では隣接地に農事試験場が設けられ、公開や公益事業を意図している。これに対し、戸定邸庭園の場合、あくまでも徳川昭武自身の興味・関心に基づく私的な生産活動であった⁽⁵⁶⁾。これは、戸定邸が徳川昭武個人の私邸であったのが要因として考えられる。さらに、大曾根邸庭園・旧堀田正倫庭園と異なり、遠隔地である茨城県に牧場が立地していたのも理由であろう。

生産活動という視点から昭武の庭園構想を考えた場合、他の華族家庭庭園とも共通する構成要素が見出せる。しかし、従来紹介されてきた華族家庭庭園の生産活動と異なり、戸定邸庭園の生産活動は私的な性格が強く、公へ向けたものではない。ただ、立花寛治伯爵のように公益事業へと発展した事例⁽⁵⁷⁾もあり、このような華族の私的生産活動をどのように位置付けていくべきかが今後の課題である。

注

*本稿で用いた松戸徳川家資料はいずれも松戸市戸定歴史館所蔵である。

- (1) 白幡洋三郎『大名庭園』1997.4 講談社発行。
- (2) 佐藤豊三「大名庭園 尾張徳川家の御屋敷と御庭」(『江戸のワンダーランド 大名庭園』2004.11 徳川美術館編・発行 pp.55-61所収)。および永井博「偕楽園の領域 - 徳川齊昭の『庭園』構想」(『茨城県立歴史館報』41号 2014.3 茨城県立歴史館発行 pp.61-72所収)、白根孝胤「尾張家における御薬園・御菜園の利用と実態」(『金鯢叢書』40輯 2014.3 徳川黎明会発行 pp.1-15所収)。
- (3) 拙稿「旧徳川昭武庭園(戸定邸庭園)の饗応と機能 - 大名華族家における江戸時代の継承」(『國學院雑誌』1310号 2016.6 國學院大學発行 pp.19-45所収)。
- (4) 拙稿「徳川昭武旧蔵《大理石獅子彫刻》《勝利者!!!》 - 華族の西洋美術コレクションが育んだ交流とその文化土壤 -」(『近代画説』25号 2016.12 明治美術学会編・発行 pp.161-178所収)。
- (5) 長谷部由紀「大名屋敷の花壇」(新宿歴史博物館編『大名屋敷 - 儀式・文化・生活のすがた』1993.10 新宿区教育委員会発行 pp.76-81所収)、白根孝胤「近世後期における尾張家の植栽空間と大名庭園」(『徳川林政史研究所研究紀要』44号 2010.3 徳川黎明会発行 pp.1-25所収)、同「名古屋城庭園の植栽空間と徳川斉朝」(『徳川林政史研究所研究紀要』48号 2014.3 徳川黎明会発行 pp.1-16所収)。飛田範夫「江戸の植木屋と花屋 - 柳沢信鴻著『遊宴日記』より」(『長岡造形大学研究紀要』5 2008.3 長岡造形大学発行 pp.41-48所収)、同「江戸の庭園」2009.8 京都大学学術出版会発行 pp.13-17。小澤弘「柳澤信鴻と園芸文化」(『東京都江戸東京博物館調査報告書29集 江戸の園芸文化』2015.3 東京都江戸東京博物館発行 pp.103-132所収)、小野佐和子『六義園の庭暮らし』2017.7 平凡社発行(初出1999~2002)。
- (6) 宮崎幸恵「徳川園の歴史的考察(3) 徳川義禮侯邸宅の庭園について」(『東海学園女子短期大学紀要』30号 1995 東海学園女子短期大学発行 pp.41-48所収)、田畑貞寿「旧堀田邸の庭園」(『佐倉市史研究』20号 2007.3 佐倉市発行 pp.14-25所収)。また、堀田家農事試験場については、大豆生田稔「堀田家農事試験場について」(『佐倉市史研究』19号 2006.3 佐倉市発行 pp.46-59所収)を参照。
- (7) 『戸定邸庭園復元工事監理委託業務報告書』2018.3 松戸市・株式会社ヘッズ発行。
- (8) 藤井英二郎「日本庭園史における戸定邸庭園の特徴と価値」(『旧徳川昭武庭園(戸定邸庭園)調査報告書』2014.7 松戸市教育委員会発行 所収)、同「明治期の2つの名勝庭園 旧堀田正倫庭園・旧徳川昭武庭園の特徴」(『風媒花』29号 2016.6 佐倉市教育委員会編・発行 pp.30-33所収)。
- (9) 齊藤洋一「戸定邸とその庭園」(『日本庭園学会誌』23号 2010.10 日本庭園学会発行 pp.35-56所収)。同「戸定が丘歴史公園と千葉大学松戸キャンパス」(田中典子編『庭園の記憶』2009.11 松戸市教育委員会発行 pp.97-99所収)。
- (10) 『旧徳川昭武庭園(戸定邸庭園)調査報告書』2014.7 松戸市教育委員会発行。
- (11) 前掲註(8)。
- (12) 依田徹『ジャパノロジー・コレクション 盆栽』2015.3 KADOKAWA発行 pp.154-155。
- (13) 国立歴史民俗博物館監修『よみがえれ! シーボルトの日本博物館』2016.7 青幻舎発行 p.122 (櫻庭美咲執筆)。
- (14) 『美術コレクション名品選』2010.7 さいたま市大宮盆栽美術館編・発行 p.18, p.20 (依田徹執筆)。
- (15) 戸定邸内でのシュロチク栽培については、昭武の曾孫で松戸徳川家第3代当主である徳川

- 文武氏の『「松戸のお山」の名残り』（『太陽』449号 1998.4 平凡社発行p.96）に記述がある。
- (16) 「戸定邸日誌」（以下「日誌」、松戸徳川家文書2-1-2-3～33）は戸定邸詰の水戸徳川家職員の記事した業務日誌で、「戸定備忘録」（1-1-3-1-11・12・14・16・17）は徳川昭武が記した備忘録である。
 - (17) 「日誌」明治40年3月21日条に「東京根岸万年青商肴屋常五郎」とあり、肴屋が東京根岸在住で、名が常五郎と判明する。明治29年9月27日条には「万年青商篠常五郎」とあり、姓が篠とわかる。
 - (18) 平野恵『十九世紀日本の園芸文化』 2006.3 思文閣出版発行 pp.117-124。
 - (19) 「博恭王殿下献上の盆栽」（松戸徳川家写真1-3-3-13-2）写真台紙裏記述「故土屋舉直君愛品、鑾山公御撮影」。
 - (20) 『伏見宮博恭王』 2012.2 ゆまに書房発行p.456、pp.494-495（原題『博恭王殿下を偲び奉りて』 初出1948.7）。
 - (21) 徳川慶喜撮影「伏見若宮御邸之温室」。写真は『徳川慶喜家 最後の家令』 2010.10 松戸市戸定歴史館編・発行p.141に掲載。博恭王の温室は従来、紀尾井町の伏見宮邸とされてきたが、博恭王は伏見宮復讐後も従来の華頂宮邸（三田邸）に居住しており、その後、大正12年7月8日に中野邸、大正15年11月10日に紀尾井町本邸へと移住している。よって、この当時の邸宅は三田邸と考えるべきである。また、前掲註（20）p.101掲載の三田御殿の写真と、慶喜撮影の「伏見若宮御邸御座敷」を比較すると、同じ建物と判断される。
 - (22) 日野原健司・平野恵『浮世絵でめぐる江戸の花』 2014.4 誠文堂新光社発行、『花開く江戸の園芸』 2013.7 東京都江戸東京博物館編・発行、『東京都江戸東京博物館調査報告書29集 江戸の園芸文化』 2015.3 東京都江戸東京博物館発行、小笠原亮『江戸の園芸・平成のガーデンング』 1999.4 小学館発行、小笠原左衛門尉亮軒『江戸の花競べ 園芸文化の到来』 2008.4 青幻舎発行を参照。
 - (23) 前掲註（9）。
 - (24) 「日誌」明治18年11月11日・12日条「同十一日晴 前日之植木、街道ヨリ畑ニ引揚ケ、各々力ヲ極メテ引ケルニ跡車道坂ヨリ落チ、夫レカ為メ転倒シケリ、去ナカラ幸ニ負傷人モナカリキ、夫レヨリコロニ移シカグラサンニテ巻キ漸ヤク午后四時ニ至リ御庭内へ引入レタリ、（後略）」「同十二日晴（中略）御庭内之植、御塀外御畑脇へ移植ス、（後略）」。
 - (25) 「日誌」明治21年2月15日条「同十五日晴（中略）八子村ヨリ引取之植木着、御手作畑迄引揚タリ、（後略）」。
 - (26) 前掲註（6）宮崎幸恵論文。
 - (27) 『徳川美術館ガイドブック』 2013.1 徳川美術館編・発行p.106（原史彦執筆）。
 - (28) 戸定邸庭園内には現在もチャノキがある。松戸徳川家現当主（昭武曾孫）徳川文武氏のご教示によると、幼少時から同じ場所にあったという。また、明治40-41年（1907-08）に昭武が撮影した写真（松戸徳川家写真1-3-5-2-59）に、不鮮明ではあるが茶の木らしき樹木が写っている。
 - (29) 松戸市史編さん委員会編『松戸市史』下巻（1） 1964.5 松戸市役所発行 pp.645-650。
 - (30) 前掲註（5）長谷部由紀論文、小野佐和子著書 pp.149-180。
 - (31) たとえば、旧柳川藩立花寛治伯爵は下谷邸に簡易試験場を設け、柳川邸内に植物を送り植えるように指示している。（内山一幸『明治期の旧藩主家と社会』 2015.12 吉川弘文館発行 pp.84-111所収、初出2010）。
 - (32) 「日誌」明治18年5月26日条に「近郷御用達御土地御世話人」、同27年1月3日条には「御出入」とある。

- (33) 例えば、明治21年10月24日に陪食を許されたのは、安蒜・平野以外は水戸徳川家の職員3名である。明治25年5月6日の昭武2男武定の授爵祝いや、明治26年12月4日の忘年会でも、職員以外に酒肴を賜ったのは安蒜と平野のみである。
- (34) 「小小平野宗七郎」(1906.10.1徳川昭武撮影、松戸徳川家写真1-3-1-118)、「平野宗七郎宅」(1906.10.12徳川昭武撮影、松戸徳川家写真1-3-5-2-295)。
- (35) 前掲註(3) 拙稿、および「日誌」明治26年2月19日条「同十九日曇(中略)一、平野宗七郎へ黒犬ノ子被下ニ付、本日同人引取之為参邸、持参セリ、(後略)」。
- (36) 「日誌」明治40年9月20日条「九月廿日曇(中略)一、平野宗七郎胃癌ニ罹リ重病之由被問召、朝鮮餅并ニ鶏卵料金千疋御下賜相成タリ、(後略)」、同年10月29日条「同廿九日曇(中略)一、平野宗七郎死亡シタルニ付、金千疋御下賜相成、金澤誠同家へ臨席、該金贈与セリ、(後略)」。
- (37) 「日誌」明治42年12月4日条「同四日晴(中略)一、平野八太郎より糯米三俵買入タリ、」、同44年1月18日条「同十八日前曇后(中略)一、犬児二頭、平野八太郎ニ被下ニ付、金澤并ニ使丁友之介牽行キタリ、尤も例年之儀ニ依リ塩鮭苆尾友之介持参被下相成リタリ、(後略)」。
- (38) この時点では東京帝国大学農科大学である。東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史2』1987.3 東京大学発行を参照。
- (39) 坂本幸子編「徳川斉昭編著書一覧」(『幕末日本と徳川斉昭』2008.10 茨城県立歴史館編・発行 pp.95-100所収)。
- (40) 白根孝胤「尾張家における御菜園・御菜園の利用と実態」(『徳川林政史研究所研究紀要』47号 2013.3 徳川黎明会発行 pp.1-15所収)。
- (41) 『徳川慶喜公伝』4 1968.1(原版1917) 平凡社発行 p.314および前掲註(21)『徳川慶喜家最後の家令』p.143掲載徳川慶喜撮影写真「林町鶴園」。
- (42) 前掲註(2) 佐藤豊三論文。
- (43) 今橋理子『江戸の花鳥画』2017.1 講談社発行 pp.198-247(原著1995、初出1993)。高松松平家でも、5代藩主頼恭が作らせた「衆鱗図」・「衆禽画譜」・「写生画帖」・「衆芳画譜」の博物図譜がある(『松平家歴史資料目録Ⅱ 絵画Ⅰ』2003.3 香川県歴史博物館編・発行 p.86)。同家の博物図譜については、松岡周子「高松松平家の植物図譜—『衆芳画譜』と『写生画帖』」(『高松松平家博物図譜 写生画帖 雑木』2014.3 香川県立ミュージアム編・発行所収)による。
- (44) 『高萩市史』上 1969.11 高萩市役所発行 pp.319-342、pp.638-643、『高萩市史』下 1969.11 高萩市役所発行 pp.206-225、大庭邦彦「水戸徳川家における家政運営の一断面—大能牧復牧事業を手がかりに」(『戸定論叢』1~2号 松戸市教育委員会編・発行 pp.3-13, pp.1-24所収)。
- (45) 「日誌」明治27年2月2日・8日条「同二日晴(中略)一、大能牧場へ為御試験ニ合半領早米種より御取寄、播種季節及肥料等大略左之通、一、種耨壹斗五合 北葛飾郡大字長沼種耨主金子七藏 シラハセトモフタフシトモ云、是ハ二合半領大字八町堀又ハ大字長沼地方ニ於テハ新三月十日頃ニ水ニ入レ、同月十八日頃ニアゲテ天日ニホシ、五日間程乾テ中水ヲイタシ、竹葉ヲホシテアタカニシテ、クルミヲキ、一昼夜ヲキ、自然ト発芽ルナリ、同三月廿七八日頃ニマキツクルナリ、」(「同八日(中略)一、御馬具并種耨壹斗五合、ピヤク檀杉種、スホウ種、此ニ少、本日荷造大能御牧場へ運便ニ批シ回漕セリ(後略)」)。
- (46) 「旅行日記 第壹号」(松戸徳川家文書1-1-3-1-18) 明治33年9月2日条「同二日晴(中略)一、午前蜂蜜ヲ採取セリ、(後略)」。
- (47) 「カビ子形ゴタク撮影控」(松戸徳川家文書1-1-6-3-6)。「箱符号40/ヲ 板番号12 月日7/24 時9.50 天気曇 絞10 シャツ5/1 影画四号ムロン・シュクラン・ド・テウール」(箱符

- 号40/ワ 板番号2 月日7/28 時9 天気曇 絞10 シャツタ1/5 影画三号ムロン・カンタルプ・プレコット・フラン・ブラン」〔箱符号40/ワ 板番号3 月日7/28 時9.10 天気曇 絞10 シャツタ1/5 影画二号ムロン・カンタルプ・プレコット・ハーチブ〕〔箱符号40/ワ 板番号4 月日7/28 時9.20 天気曇 絞10 シャツタ1/5 影画一号ムロン・カンタルプ・ノワール・ド・カルム〕。
- (48) 「日誌」明治40年7月24日・28日条「同二十四日曇（中略）一、上公ニハ午前八時頃より安食裕御供ニテ、大橋村瓜苗御見分トシテ御出張、同午前御帰邸被遊タリ、（後略）」〔七月廿八日晴（中略）一、上公ニハ午前七時頃より大橋村瓜園へ安食裕ヲ随ヒ御出発、九時御帰邸被遊タリ（後略）〕。
- (49) 「明治二十六年調 松戸御所有地反別帳」（松戸徳川家文書1-1-4-2-5）によれば、昭武は大橋道198に畑4畝6歩、同200に畑1反5畝28歩、同215に畑3畝8歩を所有しており、宮三次郎が所有地の農民である可能性も考えられる。
- (50) 秋山徳蔵『味』2005.9（原著1955）中央公論新社発行pp.60-61。
- (51) 寺本敬子『徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡』上・下巻 2009.3～12 一橋大学社会科学古典資料センター発行。
- (52) 1906年9月17日付徳川昭武宛ヴィレット書簡（松戸徳川家文書1-1-8-3-61）。前掲註（51）下巻p.195に翻刻、p.253に翻訳文が掲載。
- (53) Vilmorin-Andrieux, Les plantes potagères (1883)。
- (54) 前掲註（2）永井博論文および「幕末日本と徳川齊昭」2008.10 茨城県立歴史館編・発行。また、『水戸藩史料別記』下 1970.12 吉川弘文館発行（初出1915）には、陶器（pp.482-492）、製茶附蜜蜂（pp.501-509）として、齊昭の殖産興業政策の特記事項として立項されている。
- (55) 前掲註（2）永井博論文が指摘するように、《偕楽園図》《好文亭四季模様之図》に描かれた範囲こそが偕楽園の領域であり、齊昭の偕楽園構想には、弘道館の補完的役割を担った教育施設という機能に加え、殖産振興試験場としての機能も含まれていたとする。
- (56) ただ、養蜂事例のように、戸定邸庭園と天龍院牧場の飼養が一連の流れで解釈できる余地もあり、昭武個人の実験的生産の場であった可能性は留保しておく必要がある。
- (57) 前掲註（31）。
- 付記 本稿脱稿後に、『名勝旧徳川昭武庭園（戸定邸庭園）保存活用計画』2019.3 松戸市教育委員会発行が刊行された。拙稿「第2章 名勝旧徳川昭武庭園（戸定邸庭園）の歴史」（pp.14-27所収）、藤井英二郎氏「第3章 名勝旧徳川昭武庭園（戸定邸庭園）の本質的価値」（pp.31-52所収）を合わせて参照されたい。

【表1】戸定邸鉢植植物関係記述一覧

植物名	年	月	日	西暦	史料記述 (特記しないものは「日誌」による)
オモト	明治22	11	8	1889	同八日晴 (中略) 根岸肴屋、秋庭殿御万年草拝見トシテ参邸ス、(後略)
オモト	明治25	9	30	1892	同三十日晴 (中略) 根岸肴屋参邸ス、(後略)
オモト	明治26	9	16	1893	同十六日曇秋涼 (中略) 一、國友武貴御機嫌伺トシテ参邸、(中略) 秋庭殿御栽培ノ万年草拝見、午後三時過帰京セリ、(後略)
オモト	明治26	10	4	1893	同四日雨 (中略) 一、秋庭殿より御招キニテ、一同被出之所、万年青御植替済、陳列ヲ拝見、御茶菓を戴候事、(後略)
オモト	明治29	9	27	1896	同廿七日晴 (中略) 一、万年青商篠常五郎、万年青秋萌枝替之為メ参邸、午後一時帰京シタリ、
オモト	明治30	4	3	1897	同三日降雨 (中略) 一、万年青商篠常五郎参邸ス、(後略)
オモト	明治30	6	17	1897	同十七日曇 (中略) 一、万年青屋篠常五郎参邸之処、暫時ニシテ退出シタリ、
オモト	明治30	12	2	1897	同二日晴 (中略) 一、秋庭様万年青室新築落成ニ付、御部屋ニ於テ晚餐ヲ賜リタリ、(後略)
オモト	明治31	4	1	1898	同四月一日雨 (中略) 一、篠常五郎、万年青植替之為メ参邸ス、
オモト	明治31	9	27	1898	同廿七日晴 (中略) 一、万年青師肴屋、秋庭殿万年青植替ノ為メ参邸、午後二時半帰京ス、(後略)
オモト	明治31	11	12	1898	同十二日晴 (中略) 一、根岸万年青屋手代出頭、昼飯之後帰京シタリ、(後略)
オモト	明治32	4	1	1899	四月一日晴 (中略) 一、篠常五郎、秋庭殿万年青植替之為メ参邸、夕刻帰ル、(後略)
オモト	明治32	9	27	1899	同廿七日晴又曇 (中略) 一、篠常五郎外宅名、万年青植替之為出頭、午後五時退邸シタリ、
オモト	明治33	4	19	1900	同十九日曇又雨 (中略) 一、万年青屋篠常五郎外宅名、秋庭様御所持之万年青植替之為出頭、午後四時帰京シタリ、(後略)
オモト	明治33	9	27	1900	同廿七日晴 (中略) 一、秋庭殿万年青植替トシテ肴屋篠常五郎参邸、夕刻帰京ス、(後略)
オモト	明治33	10	31	1900	同三十一日晴 (中略) 一、万年青屋篠常五郎手代、同人より万年青返納之為メ出邸、午後四時退邸シタリ、
オモト	明治34	4	12	1901	同十二日晴 (中略) 一、秋庭殿培養万年青植替之為メ篠常五郎参邸、悉皆御植替ヲナセリ、(後略)
オモト	明治34	9	30	1901	同三十日晴 (中略) 一、篠常五郎、万年青植替トシテ参邸、夕刻帰邸セリ、
オモト	明治34	11	14	1901	同十四日晴 一、万年青屋番頭、秋庭様エ万年青進上之為メ出頭シタリ、(後略)
オモト	明治35	3	29	1902	同廿九日快晴 (中略) 一、東京根岸篠常五郎外手代ヲ連レ、秋庭様万年青植替之為メ参邸、数十之万年青ヲ植替ス、(後略)

オモト	明治35	10	2	1902	十月二日晴（中略）一、篠常五郎、万年青植替之為メ出頭、午後六時帰京シタリ、手代同伴セリ、
オモト	明治35	11	12	1902	同十二日晴（中略）一、兼テ秋庭様ヨリ競進会ニ御出品ニ相成処之万年青、篠常五郎手代持参返上ス、
オモト	明治36	4	8	1903	同八日晴（中略）一、万年青屋篠常五郎、秋庭殿万年青植替之為メ参邸、午後五時退邸セリ、（後略）
オモト	明治36	7	3	1903	同三日晴（中略）一、東京根岸篠常五郎、時下伺トシテ参邸、秋庭殿へ例年之通り枇杷沓籠ヲ献上ス
オモト	明治40	3	21	1907	同廿一日晴（中略）一、東京根岸万年青商肴屋常五郎手代出頭、午後二時帰京シタリ、
オモト	明治40	10	26	1907	同廿六日晴（中略）一、篠常五郎万年青共進会開催ニ付、秋庭様へ万年青拝借トシテ出頭シタリ、（後略）
オモト	明治43	11	17	1910	同十七日晴（中略）一、篠常五郎ハ御機嫌伺トシテ参邸シタリ、
オモト	明治44	2	21	1911	二月廿一日晴（中略）一、万年青商篠常五郎ハ秋庭様御機嫌伺トシテ出頭、小万年青式鉢并ニ御菓子壺折献上シタリ、
シャクナゲ	明治27	4	20	1894	同廿日曇（中略）一、御鉢植ノ釈奈機（シャクナギ）御植替被遊候事、（後略）
ラン	明治29	7	12	1896	七月十二日降雨（中略）一、松平頼孝様、午前十時御来邸、かうもり蘭御贈献相成リ、午後一時御帰京被遊タリ、（後略）
ラン	明治40	11	26	1907	「カビ子形ゴタク撮影控」箱符号40/ネ 板番号5 月日11/26 時10 晴 絞25 シャツタ30 薄スクリ 影画博恭王殿下献上ノ盆栽
ラン	明治40	11	27	1907	同廿七日曇（中略）一、支那蘭盆栽鉢、伏見宮へ御献上ニ付、梅吉ヲシテ運搬御届ケ申上タリ、
ラン	明治40	12	3	1907	「カビ子形ゴタク撮影控」箱符号40/ネ 板番号8 月日12/3 時9.30 曇 絞19 シャツタ17 室内 影画博恭王殿下ヨリ拝領之蘭花
アサガオ	明治33	7	31	1900	同三十一日晴（中略）一、鶴峯申教、自分丹精ノ牡丹咲朝顔八種献上之為メ持参ニテ参邸、拝謁ヲ得、土鉢へ移植シ、昼飯ヲ賜へ、午後退邸セリ、（後略）
サボテン	明治38	10	2	1905	十月二日曇（中略）一、埼玉県安行村苗木商吉田耕三郎ナルモノ、大しやぼてん拜見之上帰村セリ、（後略）
サボテン	明治39	10	14	1906	「カビ子形ゴタク撮影控」箱符号39/ラ 板番号6 月日10/14 時2.35 晴 絞15 シャツタ1/2 結果可 影画さぼてん
サボテン	明治41			1908	「カビ子形ゴタク撮影控」箱符号41/ロ 影画花シャボテン
サボテン	明治44	9	10	1911	同十日驟雨アリ（中略）一、溝口武五郎様より仙人掌、天竺牡丹、水仙等使丁持参、秋庭様へ被進タリ、

【表2】戸定邸果樹・農作物関係記述一覧

樹木・植物名	年	月	日	西暦	「日誌」史料記述
カキ	明治18	1	21	1885	同廿一日晴 高野禎・柿・桃等へ寒肥ヲナス、(後略)
カキ	明治25	4	5	1892	同五日晴(中略)一、柿樹接木之為メ平野宗七郎參邸セリ、(後略)
カキ	明治27	3	14	1894	同十四日晴(中略)一、梅柿接木トシテ御抱植木職傳蔵外ニ壱人呼出梅式拾本程接木セリ、
	明治27	3	15	1894	同十五日雨(中略)一、植木職傳蔵、柿接木トシテ本日滞在セリ、
	明治27	3	16	1894	同十六日晴(中略)一、植木職傳蔵外壱人、本日柿数本接木セリ、当御邸内御樹木枯抜剪伐トシテ滞在セリ、(後略)
	明治27	3	17	1894	同十七日晴(中略)一、植木職傳蔵外壱人、接木御用相済、本日帰京セリ
	明治27	3	19	1894	同十九日晴(中略)一、平野宗十郎參邸、兼テ御頼ミ候柿接木術施行セリ、
カキ	明治32	3	29	1899	同二十九日晴(中略)一、御庭園柿接木ヲナス、
カキ	明治33	4	6	1900	同六日晴南風吹ク(中略)一、本日柿ノ接木六七ヲ成ス、
カキ	明治35	3	26	1902	同廿六日晴(中略)一、本日柿樹接木ヲナス、(後略)
ジャガイモ	明治18	8	5	1885	同五日曇時々強雨アリ(中略)馬鈴薯ヲ掘起ス、収穫五升位(甚タ不作ナルヘシ)、(後略)、
ジャガイモ	明治18	11	23	1885	同二十三日曇(中略)小合新田平野宗七郎シヤカ<芋名>ヲ持參ス、(後略)
ダイコン	明治18	8	29	1885	同廿九日晴(中略)此日大根蒔ヲナス、
ダイコン	明治18	12	9	1885	同九日晴(中略)御畑之大根ヲ拔ヲナス、
ダイコン	明治21	12	7	1888	同七日晴(中略)此日大根洗ヲナス、(後略)
チャノキ	明治18	5	25	1885	同廿五日曇(中略)御屋敷下御茶園ノ茶つミヲナス、(後略)
チャノキ	明治21	5	14	1888	同十四日晴(中略)本日茶つミヲナス、(後略)
チャノキ	明治22	5	17	1889	同十七日曇 本日ヨリ茶摘ミヲ始ム、(後略)
チャノキ	明治24	5	10	1891	同十日晴(中略)此日御屋敷内之茶摘ヲ始メタリ、(後略)
	明治24	5	11	1891	十一日晴 此奥表一同ニテ茶摘ス、(後略)
チャノキ	明治25	2	13	1892	同十三日晴(中略)一、御馬場御新設ニ付、戸定下茶園へ椎橋久五右衛門・鈴木寅吉請負ニテ本日ヨリ着手セリ、(後略)
チャノキ	明治29	5	6	1896	同六日晴(中略)一、本日茶摘ヲ始タリ、
チャノキ	明治31	5	13	1898	同十三日半晴(中略)一、御邸ノ茶摘ニ着手ス(後略)
チャノキ	明治32	5	10	1899	同十日晴(中略)一、本日茶摘ヲ始ム、(後略)
チャノキ	明治34	5	6	1901	同六日曇(中略)一、本日ヨリ茶摘ヲ始ム
チャノキ	明治36	5	13	1903	同十三日曇小雨(中略)一、本日ニテ御園ノ茶摘終リタリ、(後略)
チャノキ	明治37	5	13	1904	同十三日曇(中略)一、本日奥一同ニテ茶摘ヲ成セリ、

チャノキ	明治38	5	16	1905	同十六日雨后晴（中略）一、茶製之為メ職人大川亀吉代人、南葛飾郡澗井村字大矢田住浅田瀧藏出頭、就業セリ、（後略）
チャノキ	明治40	5	15	1907	同十五日晴（中略）一、飯塚村大川亀吉、茶製之為メ出頭逗留セリ、
	明治40	5	18	1907	同十八日晴（中略）一、大川亀吉製茶業終了シタリ
チャノキ	明治41	5	9	1908	同九日晴（中略）一、御招待ニ依リ、徳川英子様并ニ小梅よりノ松御殿様・敬子様・温子様御同伴ニテ、午前十時三十分汽車ニテ御来邸、（中略）一、英子様御始メ御昼餐後、御写真御撮影、御庭園内御逍遥、摘茶等被遊、御晩餐後、午後六時二十九分発列車ニテ御帰邸被遊タリ、（後略）
ネギ	明治18	7	16	1885	同十六日晴（中略）小合新田平野宗一郎へ葱苗ヲ持参ス、御畑へ植付ル、（後略）
ネギ	明治18	8	24	1885	同二十四日晴（中略）小合新田平野宗七郎葱苗ヲ持参ス、（後略）
ネギ	明治20	7	12	1887	同十二日晴 平野宗七郎葱苗持参、御畑へ植付タリ、（後略）
ネギ	明治21	8	4	1888	同四日晴（中略）小合新田平野宗七郎葱苗持参ス、（後略）
ネギ	明治25	7	19	1892	同十九日晴 一、小合新田平野宗七郎葱苗持参ス、（後略）
ネギ	明治29	7	16	1896	同十六日晴（中略）一、平野宗七郎倅、葱苗持参セリ、
ネギ	明治34	9	1	1901	九月一日曇（中略）一、平野宗七郎よりねぎ苗荳荷を献上シタリ、
ザクロ	明治20	4	26	1887	同二十六日曇（中略）幸谷村ヨリ柘榴御引取御庭内へ植付タリ、（後略）
ザクロ	明治25	10	2	1892	同二日晴 一、御中庭柘榴植換ヲナス、（後略）
トマト	明治21	5	19	1888	同十九日晴 小合村平野宗七郎参邸ス、番茄・苜蓿等植付タリ、
トマト	明治26	8	9	1893	同九日晴（中略）一、西洋赤茄子搾製造伝習トシテ砂村百姓永田亀吉ト申もの、土屋様御周旋ニテ御差越ニ成候ニ付、製造方伝習ヲ受ケ候事、赤茄子搾製造法方 赤茄子三四貫目■水ニテ洗ひ、一ツーツニ之ヲ切斷シ、能ク種ヲ搾り去り、大釜ニテ徐々ニ之ヲ茹、焼付不申様度々カキマハシ、漸ク茹ルニ随ヒ泡立■見ヲ其泡ヲ拍子ニテ取除キ、熟茹シテ之ヲ桶ニ酌ミ揚ケ、目ノコマカキ米揚ザルニテ連木ヲ以テ能クスリ、小豆ノアンヲ製シ候如ク粕ヲ取去り、ザルヨリ搾り取りタル粘液ヲ一ニビンニ詰メ、コロックニテ口ヲナシ、銅線ニテ堅ク之ヲ封シ、大釜ノ内ニ茅菰ヲシキ、其上ニ順能ク之ヲ並べ、水ヲ七分日程入レ、松真木ニテ徐々ニ焚キ、沸騰スレハ益之ヲ之ヲ焚キ、凡三四時間程焚キテ火ヲ止メ、其俣翌日朝迄自然熱ニサムルヲ待テ取出スベシ、但ビン成丈ケ吟味シテ底ナキモノヲ撰ベシ、（後略）

トマト	明治26	8	10	1893	同十日晴 一、永田亀吉茄子製造出来ニ付、今朝帰京セリ、為御手当金五万疋被下候事、一、同人製造好結果ニ付、本日午前八時過ぎ帰京之事、(後略)
トマト	明治26	8	24	1893	同廿四日氣候昨日ト同シ 一、番茄製造セリ、目形式貫壱目ヲ製シ、ヒン三本ヲ得タリ、(後略)
トマト	明治26	9	11	1893	同十一日晴 一、御庭園ノ番茄製造、ビン十本ヲ搾タリ、内一ビン釜中ニ砂製セリ、(後略)
トマト	明治27	4	29	1894	同廿九日曇 (中略) 一、平野宗七郎茗荷苗并はんか之種持参参邸セリ、(後略)
ナス	明治22	5	21	1889	同二十一日晴 (中略) 本日茄苗植付タリ、
ダイダイ	明治25	12	7	1892	同七日晴風 (中略) 一、御庭園ノ橙大小式百八拾個余ヲ以テ「ボンス」ヲ御製造之処、本日ビン七本ニ入、御貯被遊タリ、(後略)
ダイダイ	明治27	11	28	1894	同廿八日雨 一、御庭園ノ橙実収穫ノ所、数三百、依テ液ヲ絞りボンスヲ製セリ
ブドウ	明治26	9	16	1893	同十六日曇秋涼 (中略) 一、國友武貴御機嫌伺トシテ参邸、庭園ノ葡萄献上、(後略)
ブドウ	明治36	10	20	1903	同廿日晴 (中略) 一、安食裕・跡部操ニハ、茨城県牛久村神谷傳平持有葡萄園ノ栽培方視察トシテ出張ス、跡部ハ同所ヨリ帰県、安食ハ夕景帰邸ス、
ブドウ	明治42	8	16	1909	同十六日曇 (中略) 一、大橋村佐々木牧之助ヨリ葡萄鉢植一鉢ヲ献上セリ、
ブドウ	明治43	8	20	1910	同廿日小雨アリ (中略) 一、御自園梨子・葡萄等、水道橋様へ御送りシタリ、(後略)
キノコ	明治26	10	7	1893	同七日晴秋冷最寒富嶽雪白シ、(中略) 一、圀順様御始メ、昭子様・ゆき子様・政子様午後より浅沼廣道御供ニテ被為入、御茸狩・栗ひろひ等御遊尽、本日御一泊被遊タリ、(後略)
キノコ	明治28	10	6	1895	同六日晴 一、土屋御姫様御遊散トシテ御参邸、御茸狩・栗落シ等終日御滞在、午後四時過御帰京被遊候、御供ニハ家令并女中壱名也、(後略)
クリノキ	明治26	10	7	1893	同七日晴秋冷最寒富嶽雪白シ、(中略) 一、圀順様御始メ、昭子様・ゆき子様・政子様午後より浅沼廣道御供ニテ被為入、御茸狩・栗ひろひ等御遊尽、本日御一泊被遊タリ、(後略)
クリノキ	明治28	10	6	1895	同六日晴 一、土屋御姫様御遊散トシテ御参邸、御茸狩・栗落シ等終日御滞在、午後四時過御帰京被遊候、御供ニハ家令并女中壱名也、(後略)
クリノキ	明治43	9	22	1910	同廿二日曇夜雨 (中略) 一、栗実ニ梨子、名古屋子爵様御廻シ申上タリ、
ミョウガ	明治27	4	29	1894	同廿九日曇 (中略) 一、平野宗七郎茗荷苗并はんか之種持参参邸セリ、(後略)
ナツミカン	明治36	4	19	1903	同十九日晴 (中略) 一、大橋松戸覺之介ヨリ夏蜜柑引取タリ、(後略)

ナシノキ	明治39	3	6	1906	同六日晴強風（中略）一、梨樹四本、大橋村久左衛門方より御邸内へ移植シタリ、（後略）
ナシノキ	明治40	11	8	1907	同八日晴 当直安食 一、松戸覺之助、梨樹栽培之儀ニ付、参邸シタリ、
	明治40	11	13	1907	十一月十三日（中略）一、金澤誠ハ梨樹引取トシテ大橋へ出張、同樹持参セリ、
ナシノキ	明治41	11	26	1908	同廿六日（中略）一、金澤誠ハ梨樹植付之為メ東京穩田なる土屋様へ出張之所、午後五時頃帰邸シタリ、
	明治41	11	28	1908	同廿八日晴（中略）一、金澤誠ハ所用有之、大橋村松戸角之助 [ママ、覺之助] 方へ出張、暫時ニテ帰邸シタリ、
ナシノキ	明治43	8	20	1910	同廿日小雨アリ（中略）一、御自園梨子・葡萄等、水道橋様へ御送りシタリ、（後略）
ナシノキ	明治43	9	10	1910	同十日小雨アリ（中略）一、御邸内之梨子壺籠宛、名古屋子爵様并ニ水道橋様へ御送り申上タリ、
ナシノキ	明治43	9	22	1910	同廿二日曇夜雨（中略）一、栗実并ニ梨子、名古屋子爵様御廻シ申上タリ、
ナシノキ	明治44	2	20	1911	同廿日晴寒（中略）一、金澤誠ハ取手溝口様へ梨樹手入方御依頼ニ付、同地へ出張、午後六時過帰邸シタリ、
ナシノキ	明治44	6	5	1911	同五日晴后小雨（中略）一、梨子畑草取、
	明治44	6	6	1911	同六日雨（中略）一、梨子畑草取、
	明治44	6	13	1911	同十三日晴雷雨（中略）一、無記事、梨子又ばらへ肥料ス、
ナシノキ	明治44	9	5	1911	同五日小雨（中略）一、溝口武五郎様ニハ、松戸覺之助方へ御出之途次、御立寄り相成、御昼餐後午後四時退邸御 [帰脱カ] 郷被遊タリ、
ナシノキ	明治44	9	7	1911	同七日晴（中略）一、一橋様・水道橋様・毛利様・土屋様等へ梨子籠詰夫々被進タリ、
ナシノキ	明治44	9	16	1911	同十六日降雨（中略）一、御畑御梨子壺籠、名古屋子爵様へ御回送申上タリ、
ナシノキ	明治44	9	23	1911	九月廿三日晴（中略）一、大橋村松戸覺之助、所用有之参邸シタリ、
ナシノキ	大正1	9	7	1912	同七日雨（中略）一、尾州様・田安様・讚州様・長府毛利様へ梨子壺箱宛鉄道便を以テ被進タリ、
ナシノキ	大正3	2	19	1914	同十九日晴（中略）一、早川久壽雄参邸、梨樹等手入ヲナシタリ、

【表 3】戸定邸畜産活動・鳥類飼育関係記述一覧

飼育種	年	月	日	西暦	史料記述 (特記しないものは「日誌」による)
養蜂	明治27	2	25	1894	同廿五日曇風 (中略) 一、安食裕養蜂密御用ニ付出京セリ、
養蜂	明治27	2	27	1894	同廿七日晴 (中略) 一、安食裕養蜂御用ニ付出京致候処、御用相済、本日午后帰邸セリ、
養蜂	明治27	5	12	1894	同十二日曇 一、安食裕養蜂密御用ニテ駒場村大学校へ伝習トシテ出京セリ、(後略)
養蜂	明治27	6	28	1894	同廿八日晴 一、安食裕養蜂受取トシテ昨日出京、本日駒場農学校へ出張兼テ約定之過分蜂一匱受取、人夫兩人ニ為担、本日午后六時無事引取候事、／「戸定備忘録 第三号」同日条「同廿八日 一、本日駒場農学校ヨリ内種蜜蜂一箱譲受、於当邸飼養ス、
養蜂	明治27	10	19	1894	同十九日晴 (中略) 一、蜜蜂十一時比ニもしや俄ニ穴巢門ニ群集、恰モ巢箱中変事アルガ如ク、其形体過日脱穴巢ノ勢ナルニ付、金澤ト共ニ巢函中ヲ検スルニ、別ニ異状モ無之処、折柄一ノバツタ虫ノ進入セルヲ発覚、依テ之ヲ掃除シ、尚巢中悉ク相改タルニ、漸次鎮静セリ、全ク此進入虫ノ為メニ動揺セルモノト見ユ、
養蜂	明治27	10	20	1894	同廿日陰 (中略) 一、蜜蜂兩三回検スルニ、異状ナシ、然レトモ昨日此方穴巢門ニ黒点ノ汚物ヲ付着セリ、直ニ之ヲ拭去タリ、
養蜂	明治27	10	21	1894	同廿一日朝陰雨十時比ヨリ晴 (中略) 一、蜜蜂今朝検スルニ、一昨日来穴巢門辺兎角汚染スルハ以テ健康ニ何ゾ異状有之哉ト心付、養蜂書ヲ閲スルニ、冬季時トシテ下利病ヲ発スル事有之トノ明文アリ、果シテ其下利ナラン、尤働蜂ノ進退ハ随分活発ニシテ能ク花粉ヲ採取セリ、(後略)
養蜂	明治27	10	22	1894	同廿二日晴 (中略) 一、蜜蜂穴巢門辺ノ汚染漸ク薄ク、午后ヨリ最モ盛ンニ花粉ヲ採取セリ、
養蜂	明治27	10	23	1894	同廿三日陰晴不定 (中略) 一、蜜蜂穴巢門辺ノ汚染次第第二薄ク、働蜂ノ挙動盛ン、花粉ヲ採取セリ (後略)
養蜂	明治27	10	25	1894	同廿五日晴夜ニ入雨 (中略) 一、蜜蜂昼後其活潑ニシテ花粉ヲ能ク採取セリ、(後略)
養蜂	明治28	5	17	1895	十七日陰 一、蜜蜂本日午前十時比飯函・木蓮ニ群集致ニ付、水離法ヲ以新函へ相獲候事、
養蜂	明治28	7	4	1895	同四日晴 一、安食蜜蜂引取トシテ千駄ヶ谷様へ出向、午后持参帰邸之上、蜜蜂巢内ヲ調タルニ、無蜂王ニ付、放棄セリ、(後略)
養蜂	大正 3	6	6	1914	同六日 (中略) 一、蜜蜂巢箱、金町農事試験場ニテ所望旨、白井和吉ヨリ申出ニ付、譲与セリ、
クジャク	明治29	4	6	1896	「戸定備忘録 第四号」同六日 (中略) 一、本日孔雀一雙ヲ買入ス、
クジャク	明治29	4	8	1896	同八日晴 (中略) 一、東京浅草公園内内藤半兵衛ヨリ孔雀一雙御買上ニナリタリ、同人午后持参ス、鳥小屋へ御放チタリ、

クジャク	明治29	5	21	1896	同廿一日曇午后雨（中略）一、浅草鳥平御交換之孔雀携へ参邸ス、
クジャク	明治30	8	31	1897	同三十一日曇（中略）一、御飼養之雛孔雀雄、御邸外鉄道線路豚畑ニテ、野犬ノ為メニ殺害セラレタリ、
クジャク	明治30	9	8	1897	同八日雨（中略）一、根本進、此度 有栖川宮様へ御進之孔雀持参出京セリ、
クジャク	明治30	9	12	1897	十二日晴（中略）一、根本進ニハ有栖川宮家へ孔雀献上ニ相成タルニ拠リ、御使トシテ出京、一泊セリ、(後略) / 「戸定備忘録 第四号」同十二日（中略）一、当荘ニ於テ昨年孵化ノ孔雀一雙、本日根本進ニ持セ、相州葉山御別荘御滞在ノ有栖川威仁親王殿下献上之事、
クジャク	明治31	6	16	1898	同十六日曇（中略）一、孔雀卵三ヶ孵化セシムル為、梅吉ニ托シ巢鳥ニ抱守セシメタリ、(後略)
クジャク	明治33	5	22	1900	同二十二日晴（中略）一、当邸産孔雀卵二個、本日以使松平頼聰様ニ被進候事、(後略)
クジャク	明治33	10	21	1900	同廿一日雨（中略）一、午前十一時学習院生徒四拾名余（内皇族、有栖川宮若宮殿下・北白川若宮御二方、久邇ノ宮若宮御二方御同伴ニアリ）教授三名引率シテ修業旅行トシテ習志野ヨリ帰途、当地へ廻遊之趣キニテ御来邸、(中略)猶 上公ヨリ各人へ孔雀ノ尾沓本ツ、贈下し、一同歓喜之状ナリし、午後一時十九分列車ニテ帰京之趣ヲ以テ十二時三十分頃退邸セラレタリ、(後略)
クジャク	明治34	6	9	1901	同九日晴（中略）一、田中村字花之井藤井松藤 [ママ、藤松] ニハ孔雀卵二個被下直書 [カ] ニ付、取引ノ為メ同人祖父某参邸ス、(後略)
クジャク	明治34	6	15	1901	同十五日雨（中略）一、孔雀卵二個、花之井村藤井松藤ニ被下ニ相成リタルニ依、右卵引取人来ル、
クジャク	明治34	7	13	1901	同十三日晴（中略）一、佐久間詮、孔雀卵拝領之為メ参邸セリ、(後略)
クジャク	明治35	7	14	1902	同十四日雨（中略）一、藤井藤松孔雀卵拝領ノ為メ参邸ス、
スズメ	明治29	6	16	1896	同十六日晴（中略）一、飯塚村鳥屋亀吉雀糞返納トシテ参邸、御礼トシテ真鴨沓羽献上候ニ付、金五拾銭申遣シタリ、
スズメ	明治29	6	17	1896	同十七日曇（中略）一、飯塚村大川亀吉、巢鳥持参ス、